

東京専門学校講師と学生たち

真 辺 将 之

ただいまご紹介にあずかりました真辺です。本日はどうぞよろしくお願いします。

お手元のレジュメを見ていただくと、非常に量が多くて、「短い時間でこんなに話せるのか？」とお思いになると思いますが、もちろん、これを全部読むわけではありません。特に今日は、学生の皆さんが授業の一環として来るということを聞いておりましたので、持ち帰って、後で読んでいただければ、一三〇年前の先輩たちがどのような学生だったのかということがよく分かるだろうということで、レジュメの方はあえて史料の量を多くしておいたわけです。

今日は、私がお話しするのは「東京専門学校の講師と学生たち」というテーマですが、先ほど、井上先生から、小野梓を中心とする土佐のネットワークのお話がありました。また、五百旗頭先生からは、大隈のネットワークのお話もありました。大隈、小野が創設した東京専門学校もまた、知識としての学問を伝授するだけではなくて、そのような人と人のつながりの場として、一つのネットワークを作ろうという意図があったのですが、そのことについてはまた後で述べたいと思います。

一 東京専門学校講師たち―「鷗渡会」の人々

それではまず最初に学校を作った講師の人々についてお話しさせていただきます。井上先生のお話でもありますが、東京専門学校をつくる上で、その実働部隊となったのが、小野梓と、彼を慕う東京大学在学中の学生七人が集まって作った鷗渡会という団体でした。

この講演会は大学史資料センターの秋の特別展の一環として行われているわけですが、今回、この特別展にあわせて、二号館の大隈記念室の常設展でも、いつもはレプリカを飾ってある大隈重信のガウンの本物が飾ってあります。総長時代に羽織っていた、緋のガウンです。まだ見ていない方はぜひ見て欲しいと思います。そしてその大隈記念室の東京専門学校設立の部分は、私がかつて展示品の策定や解説の作成にかかりました。そこに、彼ら講師たちの写真が飾ってあるのですが、ふだん、早稲田の歴史の本とかで出てくる写真というのは、もう結構年を取ってから写真が多くて、学生にとってはあまり身近に感じられないようなんですね。けれども、展示室を見ていただくとかかりますが、大隈記念室の写真は、みんな若い頃の写真になっています。実は、この東京専門学校を作ったときの講師たちの年齢は、二二歳とか、それくらいなわけです。つまり、今の学生の皆さんと変わらないのです。そこで、それがわかるように、あえて、若い時代の写真を展示するようにしました。

私も授業で学生を大隈記念室に連れていったりしますが、そうすると、この写真の前で何が始まると思いますか。実は、決まって、女子学生の間で、「誰が一番イケメンか」というような話が始まるんです（笑）。そしてその議論の結果は、大体ふたつに分かれて、高田早苗か、山田一郎か、どっちかに分かれるんですね。高田早苗の方は、同時代

においても非常に女性にもてたようで、多くの人が証言を残しています。東京大学時代に、高田は進文学社という塾でアルバイトの先生をしていたのですけれども、その道すがら、高田のファンの女性が、その姿を見るために道に並んでいたというんですね。一方、山田一郎のほうは、あまり女性にもてたという話は聞きません。それはなぜかというと、展示室に來た学生は、展示室の顔だけしか写っていない写真を見るわけですが、身長とかを含めた全体像はそれでは分らないわけです。ただ、大学史資料センターに、東京大学の卒業写真が残っていました、それを見ると、高田早苗だけ、その集合写真の中で、頭一つ抜けていて、すらっと背が高いんです。逆に、山田一郎は、頭一つ低い、背が低いんです。そのあたりが山田にモテ話がない理由の一つなのかもしれません。そして、この山田一郎という人物は、名前はあんまり知られてないのですが、『天下之記者』という新書版の本が何年か前に出ましたけれども、そこに描かれているとおり非常に面白い人物で、一種の奇人であったのです。学生時代には、毎日同じ服を着ていて、それを唾でなめして布団の下に敷いて毎日シワを取ったりとかしていて、非常に臭かったという話もあるんですね。だから、そんなこともあって、山田一郎はモテなかったのです。まあ、そんなことはどうでもいい話なのですけれども、そういう、学生の皆さんから見ても、非常に近い年齢の、東京大学を卒業したばかりの人たちが、東京専門学校を作ったわけで、そこに一つの意味があるわけです。

講師たちの経歴についてはレジュメに詳しく書いてあります。口頭で説明する時間がないので、後で見ていただければと思うのですが、いま述べたように、彼ら講師たちは、皆、東京大学で学んで卒業したばかりの人々であるわけです。じゃあ彼らは東京大学で何を学んだか。文学部で学んだ人と法学部で学んだ人、両方いるわけですが、文学部といっても、今の文学部とはちょっと違うんです。というのは当時は、政治学を文学部で教えていたのです。ですので、高田早苗とか山田一郎とか、文学部を出たといっても、彼らは政治学を学んだということなのです。で、

それを基に、東京専門学校で政治学や法学を講義したわけです。

(参考…当日のレジュメより)

・高田早苗(一八六〇―一九三八) 江戸・深川に江戸中期から続く通船問屋の八代目として生まれた。曾祖父の高田与清は、「小山田与清」の名で知られ、平田篤胤・伴信友とともに「国学三大家」と称された国学者であった。一八八二(明治一五)年に東京大学を卒業すると東京専門学校の創設に参加、草創期には「筆頭講師」として学校専任となり、英国憲法・英国憲政史・貨幣論のほか、シェイクスピアの講義まで担当した。その一方で一八八七(明治二〇)年から約三年間『読売新聞』の主筆を務め、メディアを通じた啓蒙活動に尽力した。また、一八九〇(明治二三)年に衆議院議員に当選し、以後合計六回の選挙に当選している。小野梓の没後は、学校経営の中心にたち、その経済的基盤の安定化に尽力し、校外教育の開拓、理工科の創設や、大学への昇格、大隈講堂や旧図書館(現2号館)の建設など、学校の発展に数多くの功績を残し、初代学長・第三代総長も務めた。一九一六(大正五)年には第二次大隈重信内閣の文部大臣も務めている。

・天野為之(一八六一―一九三八) 江戸・深川に生まれ、幼くして唐津藩医の父と死別したあと、東京外国語学校、東京大学文学部に進学、卒業後は立憲改進党に入党するとともに東京専門学校の設立にかかわった。学校では、経済原論・経済学研究法・銀行論・貿易論・為替論などの経済系の科目を担当したほか、行政学や文明史の講義も行った。一八八六(明治一九)年、東京専門学校の講義をもとにして富山房から出版した『経済原論』は、ミルの著書を下敷きに独自の見解を加味したもので、日本語で書かれた最初の体系的な原論と評され、福沢諭吉、田口卯吉と並ぶ明治期三大経済学者の一人に数えられるにいたっている。一八九〇(明治二三)年に衆議院議員に当選して国政の一斑を担ったほか、一八八九(明治二二)年に『日本理財雑誌』を発刊、さらにその後『東洋経済新報』の経営を引き受けるなど経済ジャーナリストとしても論陣を張った。のち大学部商科長、早稲田大学第二代学長、早稲田実業学校校長を歴

任した。

・山田一郎（一八六〇―一九〇五） 初期の政治学講義を担当。安芸国（広島県）安芸郡府中村生まれ。広島藩の藩校修道館に入り、一八七六（明治九）年、選ばれて東京開成学校に入学、のち東京大学文学部に入った。一を見て一〇を知ると、天賦の才で、大学卒業の際には推されて卒業生総代となり答辞を述べた。卒業後は鷗渡会系の改進黨機関紙『内外政事情』を発刊してその主幹として活動する傍ら、東京専門学校で政治原論・政体論・政理学・論理学・心理学などを教えた。東京専門学校での政治学の講義は一八八四（明治一七）年に『政治原論』としてまとめられたが、『政談』と区別された学問としての政治学を打ち立てた労作とされ、特にその「政党論」の部分は高く評価されている。一八八四（明治一七）年末から翌年にかけての東京専門学校移転問題の紛擾に際して仲裁を行おうとしたが果たせず、学校を去った。以後『静岡大務新聞』客員、『富山日報』主筆などを経たのち、晩年は全国各地の新聞に論陣を寄せたことから、「天下の記者」と呼ばれた。

・市島謙吉（一八六〇―一九四四） 越後国（新潟県）北蒲原郡下条村の生まれ。一八七五（明治八年）に上京して東京英語学校に入り、ついで東京大学文学部に学び、鷗渡会に参加。明治一四年の政変が起こると、それを機に卒業を待たずに退学して政治への道を進むことを決意し、翌年立憲改進黨に入党、山田一郎と『内外政事情』を発刊したが、市島の志望が政治にあったことや小野の方針もあつてか、東京専門学校開校時には教壇に立っていない。一八八三（明治一六）年、郷里に高田新聞社を興し、社長兼主筆として改進黨系の論陣を張ったが、高田事件に関して官憲の処置に対する批判的記事を掲載したため投獄された。八か月後無罪釈放となると、東京専門学校で教鞭をとり、政治原論および論理学を担当したほか、英学科で経済や歴史などの英書を講義した。一八九一年より高田早苗の後を受けて『読売新聞』主筆となった。また一八九四（明治二七）年に衆議院議員に当選し、以後八年間、改進黨系政治家として議會で活躍した。一八九四（明治二七）年から東京専門学校の運営に再び参加して事務責任者となり、以後、会計監督・図書館長・理事・維持員などを歴任して大きな功績を残した。随筆家としても名高く数多くの随筆集を刊行している。

また詳細な日記を残しており、早稲田大学史や大隈重信の活動を追う上で貴重な史料となっている。

・岡山兼吉（一八五四―一八九四） 遠江国（静岡県）城東郡横須賀生まれ。一八七六（明治九）年東京開成学校に入学、さらに一八七八（明治一一）年東京大学法学部に入学した。東京大学卒業とともに法律事務所を開設し、代言人としての活動を開始する傍ら、東京専門学校法律科の授業を受け持った。一八八五（明治一八）年に、東京専門学校法律科を神田に移転することを主張するが受け入れられず、講師を辞任。その後、英吉利法律学校（現中央大学）創設に参画した。

・山田喜之助（一八五九―一九二三） 大阪生まれで、岡松甕谷や藤沢南岳に師事し、鷗渡会の中では珍しく漢学の造詣が深かった。東京大学法学部を卒業後立憲改進党に入党するとともに、創立直後の東京専門学校で教鞭をとり、万国公法・会社法・私犯法等を講義した。一八八五（明治一八）年に岡山兼吉らと法律科の移転論を主張したが受け入れられず、講師を辞任、岡山らと英吉利法律学校を創立した。一八八六（明治一九）年司法省参事官に就任し、大審院検事、同判事を歴任、一八九八（明治三一）年の第一次大隈内閣では司法次官に就任した。また一八九八（明治三一）年から一九〇二（明治三五）年まで衆議院議員を務め、憲政本党に所属した。日露開戦直前には対露強硬政策を主張する対露同志会に参加し、日露戦後の日比谷焼討ち事件では、首謀者として投獄された。晩年は社会的弱者の側に立った弁護士として活動したが、赤貧のうちに没した。

・砂川雄峻（一八六〇―一九三三） 播磨国（兵庫県）に姫路藩の足輕の子として生まれ、一八七二（明治五）年に上京、東京外国語学校・東京英語学校から東京開成学校・東京大学法学部に学び、鷗渡会に加盟し、卒業とともに司法省出仕の誘いを断って代言人の道を選ぶとともに、東京専門学校開設に参加し、法律科講師として英米契約法・訴訟演習・英米代理法などを講じた。京橋に代官人事務所を構えながらの出講であったが、事務所経営に失敗し一八八三（明治一六）年に東京を離れて大阪に移ったことで、講師在任は一年で終わった。大阪に移転後は代言人として頭角をあらわし、二五歳の若さで推されて大阪組合代官人会長になり、また立憲改進党の拠点を当地に形成して関西政界にも地

位を築いた。この間、関西法律学校にも迎えられ、これを支えて関西大学として発展させる一方、東京専門学校・早稲田大学に対する物心両面での支援を惜まず、関西における校友勢力の中心として評議員を務めた。

・坪内逍遙（一八五九—一九三三） 本名雄蔵。鷗渡会メンバーではないが、高田・市島らと親しく、東京専門学校創立二年目から講師を務める。一八五九（安政六）年に美濃国（岐阜県）加茂郡太田村に生まれ、名古屋英語学校から東京

大学に進学。在学中、高田早苗と知り合い、無二の親友となる。落第して、高田から一年遅れた一八八三（明治一六）年に大学を卒業し、東京専門学校の講師となつて英書・西洋史・社会学・憲法論・修辞学・心理学など多数の講義を受け持った。一八八五（明治一八）年に『小説神髓』を発表し、それまでの勸善懲惡的な文学を批判して心理的な写実主義を説き、また同年、東京大学時代の同級生たちをモデルにした小説『当世書生気質』を著して、自ら近代文学の手法を実演してみせた。一八九〇（明治二三）年には東京専門学校に文学科が新設されるとその中心となり、翌年一〇月雑誌『早稲田文学』を創刊、多くの俊秀を育て、文学界における早稲田の名を不動のものとした。

彼ら講師たちが東京大学を卒業したのは学校創立直前の一八八二（明治一五）年の夏なのですが、ちょうどその前の年一〇月の、明治一四年の政変で大隈重信が政府を追放されています。東京大学は、それまで英米系の学問を教えていたのですが、政変を契機に、ドイツ流の学問を教授するようになつていきます。そうした東京大学のドイツ旋回とほぼ時を同じくして東京専門学校ができたのでありまして、結果的に、それまで東京大学で講義していた英米系の学問が、東京専門学校に受け継がれていくという形になります。なお東京専門学校という学校名も、恐らく、東京大学を卒業した人々が講師たちとして学校創設に主体的に関わったということと深く関わっているんだろうと思います。

ところで、この「専門学校」という言葉を聞いて、皆さん、今の専門学校をイメージされるかもしれませんが、実

は、当時の「専門学校」という言葉は、今の「専門学校」という言葉とは示す内容が違ふんです。今、「専門学校」というと、何か職業訓練というか、就職のための実務を教える学校というイメージがありますけれども、そうではなくて、当時の「専門学校」という言葉は、「専門的な学問を教授する学校」という意味なのです。ですから、当時から大学に近い存在なのであり、そうしたことを示すために当時の専門学校を今のそれと区別して、「旧制専門学校」と呼んだりもするわけです。ときどき、「昔は、早稲田も慶応も、単なる専門学校だった」みたいなことを言う人がいるんですが、それは当時の「専門学校」という言葉の意味をちゃんと理解していないわけです。

二 なぜ東京専門学校に入学したか

それをふまえたうえで、新しく創設された東京専門学校に、なぜ学生たちが集まってきたのが、次に問題になります。一八七二（明治五）年に、学制という新しい教育制度が發布されまして、西欧流の教育が初めて導入されることとなります。その西洋流の教育を受けた人たちが、ちょうど、この頃、青年期に達しており、さらなる新しい高等な学問を求めていたのです。こうした需要の存在が一つの理由としてあります。

それとともに、学問の側が新たな発展を遂げていたということがあります。というのは、幕末からヨーロッパの学問は導入されはじめていたのですけれども、たとえば学問の名前ひとつとってみても、和学、漢学、洋学という区分がされていて、洋学のなかでも、蘭学とか英学とか、国別に学問の名前がつけられていたりするわけです。それが、この頃になると、政治学、経済学、法学という形で、それぞれの内容ごとに学問が分かれてくることになります。つまり、こうした分け方の進化には、学問が学問として自立してきたことにより、その学問が対象とする内容によって

分類がなされるようになったということがあるのです。そうしたなかで、西洋流の教育を受けた人たちが、「もっと深い政治学や経済学、法学などを学んでいきたい」という気持ちを抱き始めており、そうした需要があったというわけです。

こうした事実を証明することとしては、洋学塾の衰退ということが挙げられます。幕末から、洋学を学ぶための私塾が沢山作られるわけですが、それが、ちょうど明治一〇年代の前半ぐらいに相次いで潰れていくのです。たとえば同人社という中村正直が作った有名な洋学塾がありますが、一時は相当多くの学生が集まっていたのですが、この頃に衰退しています。ほかにもこの頃次々と洋学塾が閉鎖されていきます。そしてそれに代わって、東京専門学校だけではなく、他にも法律系の専門学校、私立の専門学校が同じ頃に次々と誕生していくのです。そういう意味では、学問のあり方が、この時期、転換する時期であったわけで、それが東京専門学校がつけられた一つの背景であるわけです。

早稲田と並び称される慶応義塾も、もともと洋学塾として出発したものです。これも、当時、やはり洋学塾からなかなか脱却しきれずに、かなりの苦境にあったということが、わかります。

・慶応義塾の停滞

拙者之心配と申は、教育法も次第に進歩之世の中、むかし之慶応義塾流杯墨守致候而も、迺も用に適せざるは申すまでも無之、唯人の子弟を誤るに足る可きのみ。されば講堂は出来、生徒は多く、維持之法も緒に就きたりとして、最重要之教育法が時勢に適せずしては、如何にも不外聞千万。此事に付而者、拙者忝人特に心配致し居、往々塾之教師等へも話し致候。^①

・森弁次郎（一八八七年入学）の入学理由

私が東京専門学校（英語本科）に入學したのは明治二十年であつた。実はその前年の十九年に既に慶応義塾に入つてをつたのであるが、学生が下駄履の儘教室に入つたり、畳の上で万国史を教授されたりして、学校が一向整はないのが私の意に満たなかつた。ところが一方早稲田即ち東京専門学校の方は、ハイカラな洋館の教場（今では貧弱なものであるが当時はハイカラなものであつた）があるし、書物等も難しいものを使つてをつたので遙に慶応よりは進歩してゐると思つたので、二十年の春、第二学年へ編入試験を受けて入つたのである。⁽²⁾

・西村陸奥夫（一八八九年入学） 入学理由

自分の専門学校に入學するに至つた動機は、學費の不足とか、教師などをして居た、め年限の短縮とかいふやうな理由でもないが一つは學問の獨立といふ當時専門学校の標榜が氣に入つたのであつた。⁽³⁾

レジュメに史料を引用してありますが、面白いのは、どうも慶応義塾の方は、あんまり学校は整っていないとされていて、それに対して、「早稲田即ち東京専門学校の方は、ハイカラな洋館の教場があるし、書物等も難しいものを使つてをつたので遙に慶応よりは進歩してゐると思つたので、二十年の春、第二学年へ編入試験を受けて入つたのである」みたいなことを言っている人がいるということです。実際、慶応に一旦入つたけれども、辞めて早稲田に入っている人が草創期には結構いるわけです。それは、洋学塾から脱皮しきれない慶応に対して、早稲田が新しい學問というものを打ち出していた、そういう時代状況を反映しているのだと思います。もちろん慶応は、福沢諭吉という非常に優れた学者がいて、その名声がありますので、潰れはしなかつたのですけれども、この時期たいへんな苦境にあつて、その後改革をして盛り返していくことになるわけです。今だと、慶応の方がハイカラで早稲田はパンカラというのが普通のイメージですけど、この史料を見ると、創設時は、むしろ早稲田の方がハイカラな建物だったというような回想が残されているのは、非常に面白いですね。

三 東京専門学校 の 気 風



写真 1 第二回卒業生と講師（早稲田大学演劇博物館所蔵）

写真1を見てください。

この写真、何も説明しないで見せると、「あ、これは、当時の学生たちの写真だな」というふうに、普通、思うんですね。もちろん、学生が多いのですけれども、前列の右三人、これは実は講師なんです。で、前列右から三人目、この人は何か一番偉そうな、ちよつと不良っぽいような、斜めに構えてる人がいますが、これが高田早苗です。その右が天野為之、さらにその右が坪内逍遙ですね。坪内なんかは、何か気が弱そうな学生のような顔をしています。で、この三人以外が第二回目の卒業生になります。第一回の卒業生は、創設時に二年に編入して短期間で卒業した人ですので、第二回の卒業生というのが、東京専門学校が創設されてから、正規の三年間の課程を経て卒業した最初の人々になります。

この写真でわかるのは、学生も講師も年齢が近く、ほとんど同じような若者たちであったということです。これが創設時の

東京専門学校の特徴でした。東京専門学校に入学する学生たちは、実は、すんなりと中学とかを出て入学したわけではなくて、小学校を卒業して、一旦働いてから入るような人も多かったのです。そうすると、講師より年上という人も、学生のなかにはたくさんいました。ですから、もうほとんど兄弟のような感じで、親密な関係を結んでいたわけです。

・講師と生徒の親密さ

吾れ／＼東京専門学校に於ける学生時代は、学生の数も今日に比すれば極めて少数であるからでもあつたらうが、当時の先生方と吾れ／＼学生の間は極めて親密な情誼に繋がれて居つた様に思はれて、今日でも仕合せの事に感じて居るのである⁽⁴⁾

生徒も少ない代りには先生方との親みは誠に深く義は師弟であり情は兄弟の如くであつた。此の情誼は恐くは他校には見る事ができない⁽⁵⁾

で、それとともに、この写真では高田早苗が一番威張ってますけれども、その左の学生も、何か腕を組んで気が強そうな感じですね。後ろの学生も、何か結構厳しい面構えしてますけれども、これが示すように、非常に負けん気の強い学生が多かったということが、当時の学生の回想などからも分かります。

・負けん気の強さ

寄宿舎は宛で東洋豪傑合宿所のやうでした〔中略〕一寸した事にも喧嘩口論を始める、そして其の挙句には大立廻りを演る、而かも其の役者たる舎生の中には、舎監と殆ど同年輩なのが随分居つたのですもの、喧嘩の仲裁など、来ては、實際命懸けでしたよ⁽⁶⁾

・福沢との騒動

福沢の卒業生の祝辞「こゝに居る人は幽霊のような餓鬼のような」↓学生「福沢をつかまへて角力を取らう、此の学校は体育をやり撃剣をやるのだから、其の証拠を見せてやらう」と大騒ぎに。⁽⁷⁾

・近所の女性とのトラブル・北村発四郎（六尺近くの大男で髪を長くし柔道と剣術が自慢で、常に仕込杖を携へ、酒を飲むと之を抜いて振り回すと云ふ厄介者）

其当時は今と違つて学校の前は一面の田圃で榎町の通りまでは三尺位の小道が一本通して居りました。其田圃道の真中で例の隣りの女が提燈を持つてやつて来るのに出会ひましたから堪りません、イキナリ提燈を叩き落し得意の柔道で田圃の中へ叩き落し悠々として帰つて参りました。隣の内では大騒ぎで早速馬場下の交番へ訴へたと見へまして、暫くすると一人の巡査が寄宿舎の受附に参り舎監に面会を求めました。所が其の舎監は俣野時中と云ふ法律科の先生で、〔中略〕髯だらけの堂々たる偉丈夫です。此先生も酒を飲むと気が荒くなる方で木刀を打振り、土足で廊下を歩く学生を暗打にすると云ふ豪傑ですから、其応対が頗る奇観である。多数の学生は先生を中心に半円を作りイザと云はゞ巡査でも用捨せぬと云ふ気構へ、先生は東北弁で治罪法の講義を始める、さなきだに早稲田の学生と云へば矢来や馬場下の交番では敬遠主義を取り、腫物にさわる様にして居る時分であるから一人や二人の巡査で歯が立つ訳はない、不得要領で有也無也に終つたが、当の北村君は一同の中に混じ知らぬ顔で見物して居るので大笑になつた。⁽⁸⁾

例えば、レジュメにあげた「近所の女性とのトラブル」というのをみてください。引用しなかつた部分も含めて説明しますと、北村という非常に大きな男がいて、柔道と剣術が自慢で、常に仕込杖を携えて、酒を飲むとこれを振り抜いて振り回すという、まあ、非常に危険な人物がいたわけですが、これがあるとき、酒に酔っぱらつて、神楽坂の方から、歩いてきた。当時、早稲田は田んぼの中にある学校だったわけですけども、その田んぼの中を歩いてきた。そうしたところ、ふだんから学生を馬鹿にしている、学生から非常に嫌われていた近所の女性がいっぱいいたらしいのですが、

その女性がたまたま向こうから歩いてきたのに出くわした。そこで、酔っ払った北村はその女性が持っている提灯をたたき落として、得意の柔道で田んぼの中へ投げ落として、悠々と帰ってきた。しかし、これが元で大騒ぎになって、警官と学生たちがにらみ合うというような状況になったというわけです。今、こんなことが起きたら大変なことになりますけれども、当時は、これが問題にならないどころか、学生だけではなくて、実は、その寄宿舎の舎監である先生、法律家の先生も、学生の側に立って警察と対峙したなんていうことが書かれているわけです。学生と教員とが強い一体感と、警察にも屈しないという反骨精神を持っていることが分かります。

他にも同じような例としては、講師の高田早苗が、右翼団体の玄洋社に所属する人物に背中を斬りつけられるという事件があったのですが（ちなみに斬り付けたのは早大卒の山崎拓元自民党幹事長の先祖にあたる人物です）、そのときにも、学生たちが、一団となって復讐しようということで、今にも飛び出しそうな勢いになって、それを止めるのが大変だったとかいう話もあります。またその反骨精神というのは官僚に対する反発ともつながっていました、特に大隈重信が明治一四年の政変で政府を追放されたという経緯もありましたので、東京専門学校の中から官僚になるという卒業生が出ると、みんなで抗議に行く、「辞めなさい」と辞職勧告に行くと、そういうことまであった、という回想がなされています。

・一八九二年、高田早苗遭難時：「是非とも讐敵を討たいで什麼^{じま}する、学校の名折になるんで、六七百名の一団をなし、ワット騒ぎ立った、宛ら親の仇でも討つやうな心意気⁽⁹⁾」で、今にも敵対陣営に切り込みそうな騒動になり、学校幹部の苦心の結果ようやく事なきをえた。

・反官僚の気風

政府の学園に対する圧迫は実に忍びぬものがあり、従つて卒業生も官界などに入るを望む者は一人もないと同時に、某氏の如きは官界に入らんとするといふので殆ど異端者視され、辞職勧告に行く者もあるといふ始末⁽¹⁰⁾

四 特別認可学校問題

そして、その反骨精神・反官僚精神というものを、最も強く示している例が、特別認可学校問題です。実は、東京専門学校ができた当初、政府はこの学校に対して非常に強い警戒感を持っていました。要するに、大隈が謀反人を養成しようとしているんじゃないかと疑ったわけです。そして、学校に対していろいろと妨害を加えてくるわけです。で、学内にスパイが入ったりとか、いろいろ騒動を起こしたりしたわけですけれども、そういう中で、政府は徴兵令を改正するという挙に出ます。つまり、創設の翌年、一八八三（明治一六）年に、徴兵令を改正して、それまで私立学校に認められていた徴兵猶予を認めないことにしたのです。これは非常に当時の若者たちにとっては打撃が大きいもので、この結果、慶応も早稲田も、六分の一程度の学生が、退学してしまうという大打撃を受けました。

しかし、それから少し時間が経過し、一八八八年になって、この弾圧一辺倒から、だんだん、アメとムチという方向に政府の方針がちょっと変わっていきます。すなわち、レジュメに書かれている「特別認可学校規則」というものが制定されて、その認可を受けると、いろいろ就職上有利な特典が得られるから「政府の監督下に入りなさい」ということを政府から勧めてきたわけです。ところが、これに対して学生の側から反発が出て、「政府に屈服するとは許し難い」と、猛烈な反対運動が起きたということが、この史料には書いてあるわけですね。

・特別認可学校問題…一八八八年、文部省令第三号「特別認可学校規則」への対応

回顧すれば十有四年前の事である。私は学生として東京専門学校乙号寄宿舎第十八号に在つて、科書を読み終り將さに燈火を滅せんとする時、故伊藤長六氏は私の室に来て、二十一年五月文部省第三号付を以て特別認可学校規則なるものを制定し、各法律学校争ふて特別認可学校となり、我が東京専門学校もまた同規則に依つて支配さるゝこと、なるそうじやと云はれた。そこで私の云ふには、果して君の言の如くなれば、我校創立の旨趣は全く消滅するものである。抑も我校は設立日尚ほ浅きも、隠然私立大学を以て自任する者であるから、妄りに官の監督を受け所謂官吏養成所たるが如きことは、誠に好ましからぬことである。であるから此事に關しては尚ほ相談を遂ぐる必要があるであらう。云々。斯くて翌日に至り課業の終りたる後、堀越寛介、田中唯一郎、中津海知幾、野尻太三郎、山崎虎助、船橋遂賢、新部惟一、渡辺彰、中里真喜司、山口良三(野村勘左衛門の前名)、藤田達芳等の諸氏、寄宿舎の応接室に會し、大に討議を凝らし、其の結果一方には総代を選び、学校に対して私共の希望を陳述し、一方には委員を選挙して、各新聞雜誌並に本校評議員を訪問し、其の贊助を需めることとした。然るに其の事忽ち職員を知る所となり、挙動不穩との理由を以て一同退校させらるゝとの噂もあつた。是に於て私共は益々激昂し、第八講堂に於て大演説会を催ふし、私共意志の在る所を告白した。然るに偶々高田、田原両幹事は私共を招き、我校旨趣のある所を懇説せられ、学校は決して創立の旨趣を捨てたるにあらずして、唯時勢の変遷に処し、学生の為に進路の便宜を計りたるのみなれば、特別認可を受くるも、また自ら他の専門学校と異なる点ありと論された。「中略」学校に於ては後数日にして大講堂に大演説会を開き、高田幹事より我校の本領を説き、之と同時に学科の組織を変更し、行政科を設け、此科だけ法律科と共に特別認可規則により監督さるゝこと、爲つた。⁽¹⁾

この規則は、学生にとつては、就職上便宜を受けられるものであり、さらに、監督下に入れば、また徴兵猶予が受けられるようになるだろうという噂が飛んでいて、実際、この翌年、徴兵令が改正されるのですけれども、そういう

ことも見込める状況にあったわけです。にもかかわらず、学生たちは、自分たちの得になることを捨てても、政府の管轄下に入ることを潔しとしなかったわけです。で、結局このときはどうなったかというと、学校の側が、学生のそういう意思を尊重して、法律科については特別認可を受けるけれども、看板学科であった政治科、今の政治経済学部ですが、これについてはその管轄下に入らないということにしたわけです。で、代わりに、行政科というのをもう一個作って、そちらを監督下に入るので、就職上有利な特典を得たい人は行政科に入るようにというように配慮するという形になったわけです。

このように、学生が女性を田んぼに投げ落とした時には、学生のみならず講師たちが一体となって学生の味方をしたりとか、あるいは特別認可規則の適用を受けることに対する反対運動が起きたときには、学校がその学生の意思を汲んだ対応をしたりというように、講師たちが非常に学生に同情的で、かつ学生の自主性を尊重していたということが分かるわけです。これに関しては、初期の在学生が、卒業一〇年後ぐらいに学生中のことを回想して書いている文章の中にもそれを証明することが書かれています。

・学生の自主性を尊重する講師たち

凡テノ規則ハ甚タ寛大ナリ。彼レ講師等カ重ニ主張スル所ノ「マンチエスター、スクール」ノ「レーゼス。フェア」ハ事実ノ上ニ常ニ行ハル、ヲ見ル。教場ニ出席セザルモ問ハザルナリ。他出婦ラザルモ問ハザルナリ。撃剣ヲ問ハズ、相撲モ問ハズ、酒ヲ問ハズ、女ヲ問ハズ。〔中略〕然リ而シテ此不規律ノ裡ニ人ハ却テ勉勵スルモノナルヲ知り得タリ。〔中略〕更ラニ此校ノ特質トシテ記スベキモノハ其躰制ノ立憲政体的ナルコト是ナリ。学生ノ有スル權力ハ強大ナリ。学生ノ意思ニ反スル何レノ事実オモ行ハレザルナリ。課程ノ増減ヲナスナリ、試験問題ヲ損益スルナリ、規則ノ更正ヲナスナリ、更ラニ甚ダシキハ弾劾權ヲ実行スルコト是ナリ。一例トシテ記スアランカ、講師ノ面白カラザルモノア

ルニ当リテ休会ノ動議忽チニ提出セラレ忽チニ可決セラル。而シテ其講師ノ前ニ一人ノ講説ヲ聞クモノナキナリ。而モ尚ホ辭職セザランカ〔中略〕揭示室ノ上方丈余ノ所仰キ見レバ適勁淋漓ノ筆ヲ以テ飄忽震盪ノ文辭ハ掲ケラレタリ。其意ニ曰ク「本校重大ノ事件ヲ付協議スルノ必要アリ。今夕何時第三講堂ニ参集セラレヨ」。發議者ノ激烈ナル演説ノ后チ僅カノ討議アリテ動議ハ大概可決セラル、ナリ。然ル后チ直チニ委員ハ選出セラル。委員ハ決議ヲ代表シ校長及評議員等ニ処分ヲ迫ル。而シテ彈劾ハ毎ニ功ヲ奏スルナリ。⁽¹²⁾

第一ニ言ハザル可ラザルハ学問ノ独立ト云フコト是ナリ〔中略〕三カ年ノ修業中余ハ其〔改進黨の〕機関ニ利用セラル、ノ事實ヲ認メザリキ〔中略〕課程ノ講義ニ党派的語氣ヲ以テ誘導シタルガ如キコトハ余カ曾テ氣附カザリシ所ナリ〔中略〕科学ノ研究ハ風潮以外ニ屹立セサル可ラズ。思想ノ自由ハ絶對的無制限ナラザル可ラズ。⁽¹³⁾

講師たちが非常に寛大であつた、彼らは、授業の中で、自由放任、レッセフェールということを講義していたけれども、実際の学校運営においてもそれを実現させていた、自分たちが何をやっていても、それを問ひ詰めることは全くない。非常に自由に、自主性を尊重して学生に任せてくれたと、この回想には書かれています。

それだけではありません。その結果、「然リ而シテ此不規律ノ裡ニ人ハ却テ勉励スルモノナルヲ知り得タリ」と書いてあります。学校は一切学生に干渉しない。干渉しないので、勉強しないことも可能なわけですが、しかし、かえつて、そうやって放任されているからこそ、人は何かやりたいことを見付けて、それに打ち込むということを知つた、そういうことが書かれているわけです。

五 演説会・運動会・擬国会

当時の学生たちが、反骨精神が強かったということは既に述べましたが、その背景には、彼らの政治的な志向の強さということがありました。お配りしたレジュメにも書いてありますが、彼らは自分たちで演説会を開催するのはもちろんのこと、当時、開かれていた政談演説会にも盛んに出席していました。ところが、当時、「学生というのは政談演説会に出席してはいけない」という政府による規制があったわけです。で、その規制をぐぐり抜けるためにどうしたか、ということがレジュメに書いてあります。

・演説会への参加手法（密偵報告）

- 一、早稲田専門学校生徒ハ集会条例ノ羈絆ヲ脱セン為メニ其当日俄ニ退校届ヲ為シ、政談演説ノ席ニ臨ミ、演説会畢レバ復タ直グニ入校ヲ為スト言フ
 - 一、既ニ本月（明治二〇年四月）二日ノ改進黨大会ノ節モ、前手段ヲ以テ七八名出カケタルヨシナリ。
 - 一、其退校届ト云フハ全ク名ノミニシテ、其实届書杯ハ出サザル由、又直チニ入校スルト云フモ別ニ何等ノ手続モナサヌ趣ナリ。
 - 一、入塾生ハ舍長植崎俊夫ニ、通学生ハ書記佐藤鎮雄ニ退校届ヲ差出ス訳ナル由。
 - 一、専門学校生徒ニテハ右ノ臨機退校ノコトハ別ニ怪マズ、黙許ノ便法ナリト心得居ル由ナリ。
 - 一、斯様ナル手段ヲ為スハ専門学校ニ限ラズ、府下ノ学校ニハ随分アルベシト信ズルナリ。⁽¹⁴⁾
- ・塩沢昌貞（英語政治科卒業）

全体として政治に興味を持つてをつたから、演説は盛んで学生中にも雄弁家が少なくなかった。政談演説もよく聴きに行つたものである。当時学生の政談演説傍聴は法律で禁止されてをつたから、演説会に行く時は学校に退学届を出して行つた。そして帰つて来ると、その退学届を取戻したもので、僕等も二三度そんな事があつた。⁽¹⁵⁾

これは政府が学校に忍び込ませていた密偵（スパイ）が報告した史料に書いてあることなのですが、演説を聞きに行く前に退学届を出し、聞きにいつて戻ってきたときに、その退学届を取り戻すというかたちで政府の規制をくぐり抜けようとしていたわけです。それでこのことは、密偵の報告に書いてあるだけではなくて、ほぼ同じ頃在学していた塩沢という人物の回想にも全く同じことが書いてあります。ですからこれは間違いなくそうしたことが行われていたということがわかるわけです。

それから彼らが開催したものに、運動会というものがあります。運動会といつても、今のようなスポーツだけをやるものではありません。政治的な示威運動、デモンストレーションの意味が濃いものなのです。学生たちはその運動会に参加して、仮装などをしながら、自分たちの政治的な主張をそこに織り込んで、デモンストレーションのようにやっていくわけです。

・運動会

鶏ぞ鳴て五時を報ず。直に起て軍装を整ひ友人之間に奔走し六時三十分学校へ行きたりしに、最早雄士の面々行列して名簿を点検して今や発せんとす。此時遅く彼時疾く其の列に入り、縦は一丈余大巾三つ合せ白布の中間に赤「S」字を書したる大旗一对を打ち立つて進め進めと突進し八十余人を出てたつたりけり。「中略」漸く進んで神田明神に至れば各校の学生大半集まり居たり、八時三十分に至るや皆集まりたり、其の大多数は九段下の蒲生塾とか云ふと雖も、蓋し専門学校を以て第一ならん。各校の組織は其の題字各種なりと雖も要するに自由民権の板垣（イナヘ）内にあり。明治義塾

生徒の如きは緋の手拭を以て「ハチマキ」をなし恰も戦場の武士の如く見えたり。八時五十分頃に至るや、ラッパと共に一同どっと立ち出で、一千三百余名の壮士腕を撫し俊足万世橋に至る。但し明神より万世橋まで其行列絶ゆるなく、実に見物山をなし道路の混雑大方ならず。先手より船に乗り徐々櫓を動して□〔隅〕田川に向て廻る。尤も船数二十五六艘にして舳艫相衝み一艘毎に親睦運動の大旗を挙げ、又各校名々の旗幟を其の間に翻し、石油樽を太鼓に代へ之れにラッパを合せて明月の詩を賦し竊□〔窺〕の謡を唱じ、仏米の革命の嘶をなし、自由政度を称賛し、国会開設如何を議し、魯国人民之不幸を悲み、英米人民の幸福を欽慕し、清風と共に知らず知らず隅田川に至りたり。此の間の見物人は実に言語に尽し難し。或は橋梁に充滿し堤上に塞り、例ふる者なく拙文の尽くす所に非ず。〔中略〕一時頃上陸し向島秋葉山内に至る。〔中略〕其の遊戲は角力・縄引き・丸ま取り・旗取りなり。尤も快樂を極めたるは旗取りなり。〔中略〕互に争ひ或は目を打ち毛を抜き二十村の牛角力のけんくわも只ならざるの争動にて其結局必死の争へとなり、漸く大石正巳・竹内綱の尽力に依り目出度済みたり。⁽¹⁶⁾

・東京専門学校運動会

開校の翌々年の春季運動会であつたかと思ふ、余程異様の扮装をして飛鳥山へ出かけたことがあつた。白い襯衣に色インキで種々に彩色をして着たのがあり、「阿世の徒を筆誅する筆」というて三間もある筆を担いだのがあり、「天下を蹂躪する鞋」といふ旗を立て、五尺もある大鞋を背負ふたのもあり、賄夫までも大はずみで二丈もある熊手を拵へた、是れは如何なる訳かと聞くと、「大隈出」といふ意味だというて居つた。其の他大旗小旗幾統となく連なり、其の旗面には慷慨悲憤の文字が記されてあつた、実に百鬼夜行否昼行の有様であつた。斯様に甚だしかつたので、やがて警察が干渉して以来不穏な扮装や不穏な旗章は差止める、又運動会には必ず学校当局者が生徒を引率せねばならぬといふ様な警察令を出した、依て翌年からは是迄の様に面白く出来なくなつて大に落胆したことであつた。⁽¹⁷⁾

レジュメにありますように、その運動会には、他の学校の学生も参加していますし、さらに、自由民権運動の指導

者であつた大石正巳とか、竹内綱とか、そういう人物も関わつていたということが分かります。そういう意味で、自由民権運動とのつながりもあつたということが分かるわけですね。ただ、これは途中で、警察令によって、こういう政治的主張を組み込んだ運動会は開催してはいけないということになってしまつたらしく、一八八五年頃からは開けなくなつてしまふわけです。

それとほぼ代わるようにして、学校のカリキュラムの中に、擬国会というものが登場してきます。擬国会というのは何かというと、模擬的に国会のような討論や議決などを行なうものです。学校の中での授業の一環として、大臣役、代議士役、それぞれ選んで、答弁をさせたり、議決をしたり、ということをやつたわけです。

・野間五造の擬国会回顧

当時は憲法発布、議會開設を前にして居たので、……一体議會は何んな者か又たどんな風にしてやるものかしら……といふ考へが世人の頭の中に動いてゐた。そこで吾東京専門学校が高田先生等の發意によりスベンサーや、バジヲットやミル等の所謂『Organization for the parliamentary work』なる者が如何なる者であるかを實地に演習して見ることになつたのが、健か明治二十一年の十一月頃であつたと思ふ。其演習当日は講堂の入口に、『Moot Parliament』と英語で大書した紙を張つて、議長副議長並に政府委員等を選出し数十名の代議人が出席して型計りの議場を作つた者である。本校の生徒は勿論五大法律学校からも見学として沢山傍聴に來ると言ふ始末で頗る盛会であつた。法律や政治学の先生達が政府委員になり学生が野党となり読会の模様は勿論内閣不信任の決議まで在たのであつた。全ての差図は高田、坪内両先生が采配を揮り、大臣席には三宅恒徳、磯部四郎、平田讓衛などの先生方の顔が並んでをつた。

この早稲田の『Moot Parliament』が動機となつて各学校がこぞつて擬国会を行ふやうになり、東京専門学校で経験ある人達に向て其指導方を申込んで來たので、池田茂、坂巻勇助、木下尚江それに私等といふ連中が夫々手分をして

レジュメに書いてありますように、これが非常に世間の評判を呼んだわけです。他の学校でも真似する学校が出てくるし、学校以外でも、いろんな地方などでそういうことが行われるようになっていくのです。そもそも、早稲田で擬国会が最初に行われた一八八八（明治二一）年には、まだ日本には本物の国会は存在していない段階であるわけです。国に本物の議会ができるより前に、自分たちの学校の中で、実際に、その議会を運営してみようというのは、驚くべき試みだと思います。ですから、政府の関係者までが、これに学ぼうと、教えを乞うてきたというのですね。後にこの演習は「早稲田議会」という名前で非常に有名になり、雑誌や新聞でも報道されるほどのものとなりました。今ではもうこのような授業は行われていませんけれども、戦前の早稲田の授業の中では目玉とも言うべきものであったわけです。

やり方を教へに行つたものである。後には前に述べた市内の各演説ホールで、五大大法律学校が合同して大規模の擬国会を催し、これを公開して一般の人々に議会制度を知らしむるに力めた。それで勢ひ前に盛んであつた討論會は『Moot Parliament』にその株を奪はれて了つた。

これは憲法発布前後のことであつたが、時の政府の当局者や元老院議員の落武者で貴族院に祭り込まれんとして居た人達の内には開設目前に迫つてゐる議会の組織を研究する為に、学生や教職等を利用し、井生村樓や厚生館で擬国会を開催したことがあつた。この時も我専門學校に其指導方を頼んで來たので私がそこへ行く事になつた。多分其時は私一人だつたと思ふ。政府者の内には、議會制度取調委員として欧米から歸朝した中橋徳五郎、木内重四郎、有賀長文等の諸氏が居られたのを記憶して居る。開会前から非常な人氣でさしも広い厚生館も立錫の余地なく、這入れない人が外に黒山であつた。顔振は忘れて了つたが、右取調委員を始め旧元老院議員や政黨員として改進黨、自由黨の名士も沢山出席され⁽¹⁸⁾た。

六 政治運動への参加

そして学生たちの強い政治熱は、こういう演説会とか模擬国会とかで發揮されただけではなく、実際の政治活動に関わる人々も当然出てきます。そして、当時は今のようない政治的自由の存在する時代ではありませんから、そうしななで、逮捕されるような学生も出てくることになります。特に、「秘密出版事件」と呼ばれる事件では、東京専門学校から多数の逮捕者を出すことになります。

・秘密出版事件

内閣法律顧問ボアソナード「裁判権ノ条約草案ニ関スル意見」、谷干城意見書、勝海舟意見書、板垣退助「封事」、尾崎三良他四名「憲法議案ヲ下附セラレン事ヲ奏請スルノ意見書」、鳥尾小弥太他六名「元老院章程ニ関スル意見書」、ロエスレルやグナイスの憲法制定に関わる秘密書類が、反政府運動を進める民権派によって秘密印刷・出版されて、民間にばら撒かれる。

・田中唯一郎の回顧

私が在学中最も椿事といつて好いのは建白書一件です。〔中略〕それ〔谷干城意見書〕を名文と思つたか、意見に賛同したか、密に印刷して同志に頒つた。非常に秘密ですね。所が或日のこと、一同教場に出て居ると、警官が来て、宮原、小原、奥沢、野附、谷、林などといふ連中が講義中に縛られた、そうです無論私もその中に居るのです。其の時は驚きましたね、何と云つても始めてのことなり、何分事が意外なのだから。拘引せられてから種々に言訳をしたが採用にならん、遂に一同警視庁に一夜を明した。其の中一人身替りになる者があつて、たしか木原だと思ひます



写真2 ビゴー画「下宿営業 牛込区」(『TOBAE』第二〇号、早稲田大学図書館所蔵)

が、私一人が致しましたといふことで、他は放免になった。気の毒に身替りは半箇年も入獄したでせう。私の時代はいやもう中々元氣といつて宜しいか、乱暴でしたよ。⁽¹⁹⁾

レジユメには、この事件に関する、ビゴーという人が書いた有名な風刺画を載せてあります。

この風刺画はよく図録とかに出ていたりするので、見た覚えのある方も多いと思うのですが、実は、ここに描かれている鎖でつながれた二人は東京専門学校の学生なんです。そうしたことは大体、図録の解説には書いてないんですけれども、右に「下宿営業 牛込区」と題名が書いてありますね。下宿営業というのは、警察に逮捕されて留置所に入れられることを学生の下宿に見立てた一種の諧謔です。そして左の学生が何かセリフを喋っています。このセリフは、変体仮名が入っているのでちょっと読めないかもしれませんが、「こんなこともうせんもんだ」と書いてあります。「せんもん」のところに点が振つてありますけど、これは、要するに、「もう、こういうことは、逮捕されるからしない」ということと、専門学校の「専門」を掛けて笑いを取っているわけです。

この風刺画の中では、「もうせんもんだ」と、「もうしない」



写真3 青木浜之助「秘密出版事件顛末絵巻」(千曲市教育委員会所蔵)

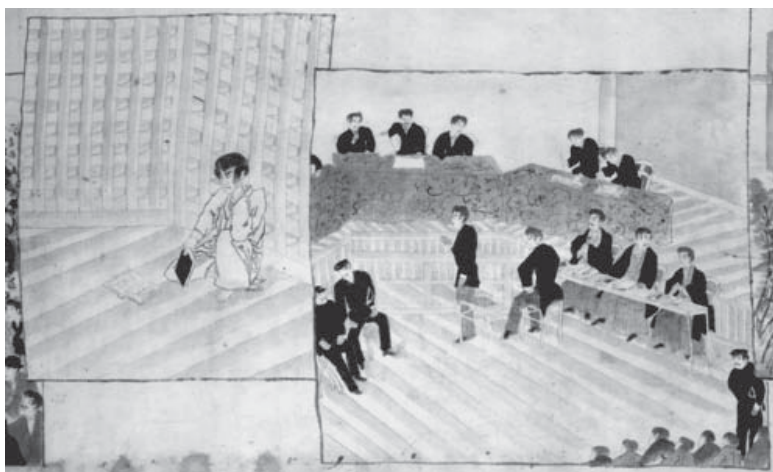


写真4 青木浜之助「秘密出版事件顛末絵巻」(千曲市教育委員会所蔵)

みたいに書かれてますけど、実際の学生たちがどういう気持ちだったかというと、実は、そんなことに懲りてる様子はないわけです。レジュメに、青木浜之助という東京専門学校卒業生の「秘密出版事件顛末絵巻」というのを載せておきましたが、これも、さきほどのビゴーの絵と同じ秘密出版事件で青木が逮捕されたときの絵巻物です。

この絵巻は、獄中にいるときから、その後、裁判を受けるまでの一連の経過を、絵師に書かせて残したものののですが、その後青木の子孫の家にずっと伝わってきて、近年、筑摩市の教育委員会に寄贈されたものであります。こういう形で、自分が逮捕されたことを、むしろ誇りに思って、絵巻物に残して、子々孫々まで伝えようとしたわけです。だから、「もうせんもんだ」どころか、決して逮捕に屈することなく、自分の意見を主張して政府に抵抗して頑張ったことを誇りに思い、その後もその志を持ち続けようという思いを抱いていたということが、こうした絵から分かるわけです。

しかしながら、このような政治的な活動、あるいは政府に抵抗する運動というものは、単に政府批判だけではなく、対外的な膨張の主張やナショナリズムとも結び付くことがあります。一八八四（明治一七）年に甲申事変、つまり朝鮮の日本公使館とそれを防衛していた日本軍、さらにそれと朝鮮の改革派が手を組みクーデターを起こすという事件が発生しました。結局このクーデターは、清国の軍隊によって鎮圧され失敗に終わることになりますが、鎮圧に際して日本人が殺害されたということが大きく新聞などで報じられ、日本の世論は沸騰することになります。政治に熱中していた東京専門学校（早稲田）の学生たちも、この報道に刺激されて憤りをあらわにし、伊藤博文に連名で意見書を提出しています。それはレジュメの方にのせてあります。

・甲申事変に関する意見書

抑モ清軍及ビ朝鮮暴民ノ我ガ帝国ニ対シテ無礼ナル事ハ今更ラ某等一同ノ陳述致スマデモ無之次第ナルガ、彼等ガ我ガ公使ヲ襲撃シ、剩ヘ日本人ト認ムルトキハ之ヲ殺害スベシナド揚言致シタルガ如キハ言語同断ノ事ニシテ、我ガ帝国臣民ガ悉ク切齒扼腕致ス所ニ御座候。右ニ就キ大政府ニ於テモ既ニ特派大臣ヲ御差遣相成リタルハ充分ノ御談判有之儀トハ奉存候得共、草莽布衣ノ臣民ハ尚ホ杞憂ヲ抱キ、劍ヲ撫シ慷慨罷在申候。〔中略〕此レガ為メ某等ノ愚考仕ル所ニテハ、左ニ列叙スル如キ個条ノ要求ヲ為シ、彼レ若シ之ヲ承諾セザルニ於テハ直チニ同問罪ノ師ヲ起シ、正々堂々ノ陣ヲ張り彼レヲシテ懾服致サセ候ハデハ、到底我ガ帝国ノ体面ヲ全フシ我ガ帝国ノ威嚴ヲ輝ス事ニハ至リ兼ル儀ト奉存候。

第一 清国ニ向テ朝鮮国在留ノ支那兵ヲ撤去シ爾後其干渉ヲ断ツ事。

第二 清韓両国ニ向テ這圉ノ主唱者ヲ死刑ニ処セン事ヲ要求スル事。

第三 清韓両国ニ向テ實際損害ノ外充分ノ要償ヲナサシムル事。

〔中略〕若シ万一右等ノ要求ヲシテ満足セシムル能ハザルガ如キアラバ、我ガ帝国ニ取リ此ノ上モナキ恥辱ナレバ、苟モ我ガ臣民タルモノハ粉骨碎身以テ国威ヲ輝カサゲル可ラザル儀ト決心罷在候。⁽²⁰⁾

つまり、事件に関わったものは死刑にして十分な賠償金を取るべきであり、「問罪ノ師」つまり戦争も辞さない態度で、強硬な態度を取れというようなことを、切齒扼腕・悲憤慷慨するような文体で書いているのです。署名した人物は実に一一九名という驚くべき数にのぼっていますが、署名者の名前をよく見てみると学生だけではなく学校の教職員の名前も少数ですが入っていたりもします。この後、交渉のために伊藤博文が朝鮮に渡ることになりますが、伊藤の出発に際して新橋駅までこの学生たちが押し寄せて檄文をばらまくというような事件もあったようです。⁽²¹⁾ 当時は

クーデターの詳細などの情報も正確には入ってきておらず、学生たちは単に日本人が殺されたということだけを聞いて怒っている側面も強いのですが、真相究明を求めるのでも、外交的対話を主張するのでもなく、いきなり戦争も辞さずに強硬な態度を取れと主張するあたりに、彼等学生たちの荒々しい気風と政治熱が、対外強硬的なナショナリズムと結合した際にどのようなように表出されるのかという別の一面を見ることができるようになっています。国内問題では、反政府ということが議会政治によって国民の意見を尊重せよという意見につながっていく一方で、対外的な問題になると、そうした政治熱と反骨心が異常に沸騰して強硬な意見を述べることにつながっていくという状況がうかがえると思います。こうした要素は、後に「内に立憲主義、外に帝国主義」あるいは「立憲帝国主義」と呼ばれるような、近代日本のナショナリズムの一つの重要な潮流につながってくるものであると指摘できるとともに、ある意味では、今日にまで通底する問題でもあるということができるとでしょう。

七 講師たちの人材育成方針

それでは、こういう場で学んだ学生たちは、学校を卒業してのち、どういう進路に進んだのか、ということを見てみたいのですが、その前提として、まず、講師たちが、学校においてどういう人材を育成・輩出したいと考えていたのかということ、を、ちょっと見ておきたいと思います。レジュメをご覧ください。

・高田早苗「曰く成るべく官吏たる莫れ、曰く成るべく地方に往け、曰く立身出世を急ぐ勿れ」「民間は向後一年増に都合よくなるべし今は不景気の極度なるが故に地位を求むること困難ならざるにあらずと雖も米の飯と日輪とは必ず諸

子に伴ふべし〔中略〕帝國議會開くると共に民間人士の登竜門は開けたり、自今以後參議學なりと嘲笑されし政治學を修めたる者も事實に於て國務大臣たるの機会なきにあらず」〔左れば諸氏にして立身出世の念盛んならば、先づ官吏たらんとするの念を絶ち、徐ろに地歩を固めて、諸子三寸の下と一枝の筆とを藩閥打破の一方に差向くべし〕⁽²²⁾。

・山田一郎「東洋諸邦古来の沿革する所中央集權の弊ありて地方自治の實なく遂に此の西洋諸邦に凌駕せらるゝ所となるに至りたるは余の殊とに之を言ふを要せざる所なり」〔日本全國大都是一にして地方は到る處として其の尽るを知らざるなり地方は根本にして大都是枝葉たり今夫れ枝葉に拘泥して根本の改良を怠ること豈に士君子の屑しとする所ならん哉諸君は来て地方人智の開發を計るべきなり〕⁽²³⁾」

・高田早苗「智識の中央首府に集りて地方の光景日々に寂寥たるに至れるは、中央集權の結果固より已むを得ずと雖も、この分にて打捨て置かば、日本といふ國家腦充血となること受合なり」⁽²⁴⁾」

・しかし、山田一郎は「得業諸氏は何故に官途に就くと地方に出るとの二者を忌むこと蛇蠍の如くなる哉」とも学生の現狀を指摘。

・家永豊吉「第一政治家第二法律家第三新聞記者第四著述者第五実業家第六教師是等の如きは此の學校が養成せんとする所の人物であらふと存じます」⁽²⁵⁾。

・高田早苗「日本は早晚政党内閣になるに相違ないが、其の政党内閣になつた時には、少なくとも其の内閣の半分は、東京専門學校の得業生が其の地位を占められなければならん」⁽²⁶⁾」

・家永豊吉「国会議員になると云ふことは中々六ヶしい」〔国会議員にならぬでも地方に居て県會議員になつても随分其地方に勢力を及すことが出来ます〔中略〕国会議員は県會議員の卒業生であると思ふから其根柢を堅くして益々それを勉めると云ふことは諸君に取て甚だ大切なことであると思ひます〕⁽²⁷⁾」

・高田早苗「各地方は今が即ち開拓時なり、諸秀才にしてこの際開拓を怠らずんば、小にしては県會議員大にしては國會議員の地位必ず諸秀才の有に帰せん」⁽²⁸⁾」

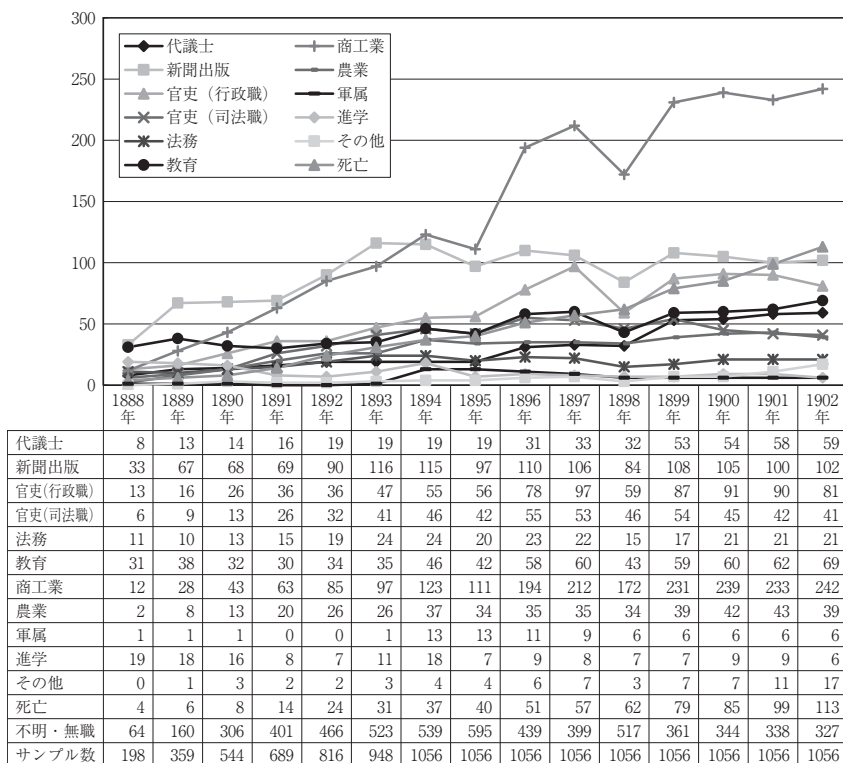
最初に載せてある高田早苗の言葉を読みますと、「曰く成るべく官吏たる莫れ、曰く成るべく地方に往け、曰く立身出世を急ぐ勿れ」と、こういうことを言っているわけですね。さらに、真ん中ら辺に書いてあります、家永豊吉という、当時講師を務めていた人物の言葉を読みますと、「第一政治家第二法律家第三新聞記者第四著述者第五実業家第六教師是等の如きは此の学校が養成せんとするところの人物であらふと存じます」と言っています。あるいは、その次にあります高田早苗の言葉では「日本は早晩政党内閣になるに相違ないが、其の政党内閣になつた時には、少なくとも其の内閣の半分は、東京専門学校の得業生が其の地位を占めなければならん」と言われています。ここである政治家というのは、要するに、官僚ではなくて、国會議員、あるいは国會議員でなくても地方の議員というものを指しています。こういった政治に関わる者や、あるいは新聞記者とか実業家とか、そういう「民」の立場から近代化を担っていく人物を育成したいと考えていたということが分かります。

以上見たような、東京専門学校が輩出するべき人物像については、明治中期頃まで、ほとんどの講師が、ほぼ同じようなことを述べていて、一致しているということを指摘できます。ということは、そういう明確な方針が学校にあったということを証明しているのだと思います。学生たちに政治的志向が強かったことはさきほど述べましたけれども、それはこうした講師たちの人材育成の方針とも結びついているところがあるのだらうと思います。

八 学生の就職状況

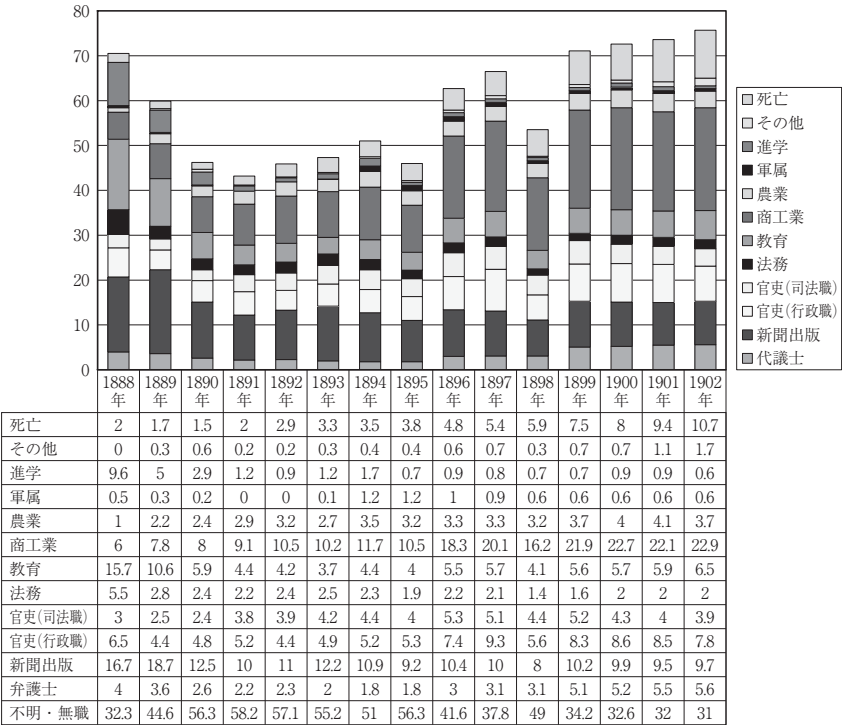
ではそうした講師たちの目論見は達成されたのでしょうか。実際に卒業した人たちの進路に関する表をレジюмеに掲げておきました。

表1 全学科卒業生の就職状況（実数）



時間がありませんので、ちょっと駆け足になりますが、表3だけ説明したいと思います。これは一八九七（明治三〇）年の時点での主要な私立専門学校の卒業生の就職状況を比較したものです。これを見ると、官吏とか、あるいは法律関係の専門職、弁護士とか判事・検事という方では、東京専門学校は、東京法学院とか明治法律学校とかに比べて圧倒的に劣っているわけです。東京専門学校の法律科というのは、実は、創立したのちに、内部分裂が起きて、講師たちが辞めてしまったので、低迷の状況にありました。ですので、法律の方面では、人材輩出の面で少々振るわないところがあったのですが、逆に、代議士とか地方議員については非常に多く輩出していること

表 2 全学科卒業生の職業比率 (%)



がわかると思います。また、新聞雑誌記者について言えば、東京専門学校全体で一一五人、輩出率は二五%となっています。これは他の専門学校と比べると、圧倒的に違いますよね。ここが、やっぱり東京専門学校の特長だ、やっぱと思うわけです。

他に細かい表をもう二つ付けてますので、もう少し詳しく知りたい方は後でじっくり見て見ていただければと思います。また、もっと深い分析は、私が二年前に書いた『東京専門学校の研究』という本のなかで、もっと沢山の表を付けて分析しておきましたので、興味のある方は見ていただければと思います。

それでは、こうした就職状況の違い、特色といったものが、なぜ生じる

表 3 1897（明治30）年時点での主要私立専門学校卒業生就職状況

	東京法学院		明治法律学校		日本法律学校		和仏法律学校	
	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率
高等官	45	6.4	19	3.7	17	13.4	7	2.6
判任文官	241	34.2	84	16.2	49	38.6	84	31.2
判事検事	134	19.0	126	24.4	18	14.2	48	17.8
弁護士	143	20.3	190	36.8	13	10.2	66	24.5
衆議院議員	2	0.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
府県会議員	7	1.0	10	1.9	0	0.0	3	1.1
新聞雑誌記者	14	2.0	16	3.1	7	5.5	2	0.7
教育	7	1.0	3	0.6	0	0.0	4	1.5
銀行・会社員	96	13.6	55	10.6	23	18.1	43	16.0
進路判明者計	704	100.0	517	100.0	127	100.0	269	100.0
卒業生総数	2030		1585		378		665	

	専修学校 （法律科）		独逸学協会学校 （専修科）		東京専門学校 （法律科）		東京専門学校 （全学科）	
	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率
高等官	3	3.1	33	28.7	15	6.2	67	14.6
判任文官	17	17.7	49	42.6	70	28.8		
判事検事	19	19.8	12	10.4	30	12.3	43	9.4
弁護士	26	27.1	2	1.7	24	9.9	22	4.8
衆議院議員	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	0.9
府県会議員	1	1.0	0	0.0	10	4.1	25	5.5
新聞雑誌記者	2	2.1	0	0.0	20	8.2	115	25.1
教育	5	5.2	4	3.5	14	5.8	45	9.8
銀行・会社員	19	19.8	12	10.4	68	28.0	124	27.1
進路判明者計	96	100.0	115	100.0	243	100.0	458	100.0
卒業生総数	259		164		570		1769	

※「東京専門学校（全学科）」は山田一郎「本校の卒業生に就て」（『早稲田学報』9、1897年）による1896年の数値。

のでしょうか。学校ごとにここま
で就職状況が違うというのは、今
だと、あまり考えにくいと思いま
す。まあ、今でも早稲田はマスコ
ミに強いと言われるんですけど、さ
すがに早稲田が二五％で、他の学
校が三％とか五％とかいうよう
な、そこまでの違いというのは今
ではないだろうと思うんです。で
はなぜ当時はそうした圧倒的な差
があったかという点、これは、今
のような新卒一括採用とか就職試
験とかいうような慣行はまだ存在
しておらず、就職というものが基
本的にコネで決まっていたからな
のです。つまり、学校の教員、O
B、友人といったネットワークに
よって、就職先が大きく左右さ

れ、その後の人生に大きな影響をもたらすことになったのです。ですので、最初に言いましたように、東京専門学校は、そうしたネットワーク形成としての場としての機能を果たしていたということが言えるわけです。

なお、さきほどの表を見て、もしかしたら疑問に思う人もいるかもしれません。実は、よく見ると、官吏の数が、学生たちのあいだで官僚に対する反発心が強かったという割には、結構いるんですね。ただ、その内訳を見えますと、実は、その大部分が地方の町村の官吏であって、さきほど述べた反官僚意識とは必ずしも矛盾していないのです。要するに、「地方に行け」という高田早苗の方針を守って、地方で名望家として町村長や府県・町村の官吏になった人物が多いわけです。さらに、中央の官僚にも、ある程度はいるのですけれども、それも、どの省庁にいかとうことを見てみますと、一番多いのは会計検査院一四名、それから農商務省八名、外務省四名という順番になっていくわけです。で、会計検査院というのは元々、大隈が作ったもので、多少、特殊な役所であるわけです。しかも、その会計検査院一四名のうち九名、農商務省八名のうち七名、で、外務省にいる三名全員が、実は大隈重信が松方正義と提携して内閣を組んだいわゆる松隈内閣の時期に就職しているのです。ということは、大隈が内閣にいた時期に送り込まれているということから考えると、これは大隈ないしその周辺から何らかの口利きがされていたと考えられるので、従来言われているような反官僚意識というものは、必ずしも矛盾しないものであったのだろうと思うわけです。ただ、もちろん、いくら反官僚といっても、なかには、高等官試験を受けて官僚になる人も少数ながらいますし、政治の方面に進んでいく人の中には、大隈の改進黨と敵対していた自由党に入る人や、いわゆる吏党と言われる政府系の政党に入っている人も、数は少ないながら、ポツポツといえますので、その意味では、非常に多彩な人物を輩出しているということが言えるわけです。

おわりに

ちょっと駆け足で申し訳ないのですが、時間がなかったのでそろそろまとめさせていただきます。初期の東京専門学校
の講師の方針、そして、それを受けて入学してきた学生たちによって形作られた東京専門学校の気風、学風というものは、まず第一に、強い政治熱、そして、「民」の立場へのこだわり、ということが言えると思います。そしてその背後には、「自由と多様性」を重んじる学風というものが存在しているといえるでしょう。そして、この「自由と多様性」という点は、早稲田の特徴として、今日まで受け継がれている要素でもあると思います。まあ、今の学生さんはどう思っているかは分かりませんが、僕ぐらいの年代までの卒業生は、やっぱり「早稲田というのは非常に自由な大学だ」、そして「いろんな学生がいる大学だ」という思いを母校に対して持っています。サークルを見ても、本当に沢山のサークルがあつて、どんな人間であつても自分にあつたサークルを見付けることができますし、気の合う友達を見付けることができます。どんな人にも居場所が見つかるくらい、多様な個性の集まった学校であるというのは、大体の卒業生・在学生が口を揃えて語ることであつたわけです。そうした学風が、実は、東京専門学校の時代から既に存在していたということが言えるわけです。

で、この自由な学風ということの背後には、先ほど五百旗頭先生からお話があつた大隈の方針が関係しています。つまり、「大隈の自己抑制」「政党指導に際しても、地方に自分の考えを押しつけない、放任主義的な立場であつた」ということをおっしゃられていましたが、それは東京専門学校の経営に関しても言えることなのです。大隈は確かに東京専門学校を創設したのですが、その学校の中身をどうするかということについては、ほとんど口を出して

いないことも事実なのです。つまり、学校の実務は、小野梓と、その下にいる講師たちに全て任せている。こうした大隈の姿勢も、自由な学風を形作る一つの条件になっただろうと思うわけです。そしてさらに、その小野梓を中心とした人々が、多様な人々のネットワークを作ろうということで、この学校における自主性、個性、自由、そういったものを尊重し、多様な学生たちがぶつかり合う場としての環境づくりに励んだわけです。レジュメの最後に引いている史料を見てください。

・多様な個性がぶつかりあう時代

其時分の学生と云ふものは、今日の諸君に較べてみますと、随分極端なことを好んだものである、例へば体育に熱心なる人はどうであるかと云ふと、殆ど体育気狂といつても宜い位で、碌々教場へも出ないで、毎日角力を取つたり撃剣をやつたり〔中略〕、其傍にはどうであるかと云ふと、非常な勉強家が居つた。即ち苦学をする人である、一杯の水一塊の水一塊のパン位で飢渴を凌ぎ、さうして毎日日本ばかり読んで居る、机に向つて夜も昼も青い顔をして、殆ど病人が勉強して居るかと思ふやうな様子をしてやつて居つたのである、さう云ふ熱心な勉強家も居た、さうかと思ふと非常な雄弁家が居つて、毎日々々議論ばかりして居る、〔中略〕さうかと思ふと或は耶穌教家とか仏教家とか或はユニテリアンだとかいつて、宗教論が喧ましくなつて、毎日々々此宗教の事に熱中して居つた人もある、〔中略〕兎も角もさう云ふ極端な人が其時代にあつたと云ふ事は、今日から見れば殆ど不思議な位であります、それでさう云う時代に於て、我々はどう考へて居つたかと云ふと、随分世間に向つて誇つたのである、之が即ち自由教育の特色である、従つて学問の独立と云ふものも、此自由の境涯から起るものであると言つて威張つて居つたのである⁽²⁹⁾

ここに書かれていることから、自由と多様性というものが東京専門学校の初期から存在していたこと、当時から実に多様な学生がいたということがわかるわけです。

しかし、自由と多様性という共通項とは別に、今日とは、多少異なる部分があることもまた事実であろうと思います。それは、つまり、先ほど、官僚になろうという人物のところに抗議に行つて、辞職勧告に行つたとか、喧嘩をよくしたということについて触れましたが、当時は、多様な学生がただいるというだけではなくて、その多様な個性が学校という場でさまざまにぶつかり合っていたというところに、一つの大きな特徴があると思うのです。

他方、今の早稲田も、さきほどから言っていますように、多様性はもちろんあります。ただ、そのぶつかり合いとというのがあるかどうかという、かなり疑問に思わざるをえません。これは早稲田だけの問題ではなくて、時代状況というものもあると思いますが、明治期には、喧嘩も非常に多い代わりに、喧嘩をしながらも、しかし、何か共通前提のようなものがあつて、決して断絶をしない。昨日喧嘩していた人間が、明日には話し合っていたりというようなことが、この時代には非常に多いわけです。大隈自身も、そうです。明治一四年の政変で追放されたと思えば、黒田内閣、つまり、その一四年の政変で対立した黒田清隆の内閣に入閣したりするわけですから、そういう時代の空気というものによるところが大きいと思うのですけれども、こうした個性のぶつかり合いというものは、非常に今の早稲田に欠けているものでもあり、かつ、今の日本に欠けているものであると思うわけです。

そういう中で、この大隈、小野、東京専門学校の歴史に学ぶとすれば、多様性というだけではなくて、その多様性がぶつかり合うという要素、一三〇年経って失われつつあるそうした気風、雰囲気、われわれの手でどう取り戻していくかということだろうと思うのです。つまり、もっと喧嘩せよ、ということ。もちろん、喧嘩は今でも無いわけではありません。しかし、今は、なかなか喧嘩をしない代わりに、一度喧嘩すると、すぐにもう関係が切れてしまふ。インターネットなんか特にひどいものです。実際、面と向かつては喧嘩なんかできないくせに、ネットでは本当に酷い悪口を書いたりする。ソーシャルネットワークでは、ブロックとかいう機能が、何かもういろんなのに付い

ていて、気に食わないものはすぐにシャットアウト、関係を切ってしまう、そういう環境が形作られちゃっているわけです。

そういうなかで、多様なネットワークを構築していくというのは非常に難しいことです。ネットワークというのは、ただ単に同じような人間がつながっていて意味がないわけで、先ほど、馬場と小野の対照的な二人が、「方針は違いつつ、底の所でつながる部分があった」というお話が井上先生からありましたけれども、そういう要素が、今、非常に欠けているのではないかと思います。そして、こうした点にこそ、初期の東京専門学校に、今の早稲田なり日本なりが学ぶこともあるのではないか、というのが最後の私のまとめになります。嫌なものに触れ合わなければ、強さも生まれません。異なる要素がぶつかりあうことなしに、新しい発想も生まれません。多事争論・切磋琢磨が大事なわけです。

以上、非常に駆け足で申し訳ないと思いますが、史料をたくさん載せておきましたので、今ここにいる学生のみなさんは、ぜひ後で読んでいただければ、自分の先輩たちの話ですから非常に面白く読めると思いますし、また、私が説明した以外の新たな発見もあるかもしれないと思います。歴史というのを嫌いな学生も結構多くて、それは、歴史を暗記学問だと思っていることが大きいのですが、史料を直接読むと、いろいろと自分なりの発見というのができますから、ぜひあとでレジュメを読み返して、「あの真辺という人は言わなかったけれども、こういうこともあるんじゃないか」みたいなことを自分なりに考えてみると、非常に面白いのではないかと思います。

以上で、私のお話を終わらせていただきたいと思います。

註

- (1) 一八八七(明治二〇)年四月二八日付書翰(『福沢諭吉書簡集』第五卷、岩波書店、二〇〇三年、一八六頁)。
- (2) 森伝次郎「当時ハイカラな早稲田」(『早稲田学報』四〇二、一九二八年八月)。
- (3) 「校友西村陸奥夫氏訪問記」(『早稲田学報』一七六、一九〇九(明治四二)年一〇月)。
- (4) 昆田文二郎「情味掬すべき師弟の間柄」(『早稲田叢誌』一、一九一九(大正八)年)。
- (5) 平野高「現今では見られないあの頃」(『早稲田学報』三九二、一九二七(昭和二)年一〇月)。
- (6) 増子喜一郎「蜜殻な寄宿舎」(『早稲田学報』一五三、一九〇七(明治四〇)年一月)。
- (7) 「法学博士天野為之氏談」(山本利喜雄編『早稲田大学開校東京専門学校創立二十年記念録』、一九〇三年、早稲田学会発行) 二九九頁。
- (8) 中村常一郎「ヤツと叩きつけたその腕前」(『早稲田学報』三九二、一九二七(昭和二)年一〇月)。
- (9) 増子喜一郎「蜜殻な寄宿舎」。
- (10) 瀬川光行「学園初期の学生生活とその新卒業生の苦闘」(『早稲田学報』三六四、一九二五(大正一四)年六月)。
- (11) 「並木覚太郎氏談」(山本利喜雄編『早稲田大学開校東京専門学校創立二十年記念録』)
- (12) 島田研一郎『うき草の花』(羽村市史資料集1、羽村市教育委員会、一九九三年一月。原本執筆は一八九四年) 五〇～五三頁。
- (13) 島田研一郎『うき草の花』四六～五一頁。
- (14) 国立国会図書館所蔵三島通庸関係文書「生徒臨時退校ノ件」(『早稲田大学百年史』第一卷、一九七八年、早稲田大学出版部、五〇六頁)。
- (15) 塩沢昌貞「先生を虐めた吾々の学生時代」(『早稲田学報』三九七、一九二八(昭和三)年三月)。
- (16) 一八八三(明治一六)年四月二三日付広井十三宛広井一書翰(横山真一他編『近代長岡と広井一』、二〇〇三年、横山真一、五五～五六頁)。
- (17) 「山沢俊夫氏談」(山本利喜雄編『早稲田大学開校東京専門学校創立二十年記念録』) 三三一頁。
- (18) 野間五造「早稲田議会はかくして起つた」(『早稲田学報』三九六、一九二八(昭和三)年二月)。
- (19) 「田中唯一郎氏談」(山本利喜雄編『早稲田大学開校東京専門学校創立二十年記念録』) 三三四～三三五頁。なお本文中木原のみが責任をかぶり後は放免されたというのは事実誤認で、実際には引用文中にある木原勇三郎のほか、少なくとも野附常雄、今井鋌一、奥沢福太郎が入獄している(「同窓出獄慰労会」、『専門学会雑誌』八、一八八九(明治二二)年五月)。これら少数者が犠牲となり、他に関わっていた数多くの学生が放免されたということであろう。
- (20) 「東京専門学校生徒等朝鮮事変談判二伊藤伯へ上ル書」

- (一八八四(明治一七)年二月二五日、『秘書類纂外交編』中巻、秘書類纂刊行会、一九三五年)。
- (21) 一八八五年三月一日付広井十三宛広井一書翰(横山真一他編『近代長岡と広井一(二)』、横山真一、二〇〇五年)。
- (22) 高田早苗「諸学校の卒業生に告ぐ」(『同攻会雑誌』六、一八九一(明治二四)年八月)。
- (23) 山田一郎「在京同攻会員に向て更に望む所あり」(『中央学術雑誌』二一、一八八六(明治一九)年一月)。
- (24) 高田早苗「諸学校の卒業生に告ぐ」。
- (25) 家永豊吉「我校の養成すべき人材」(『同攻会雑誌』八、一八九一(明治二四)年一〇月)。
- (26) 高田早苗「本校創立十週年祝典に於て」(『中央学術雑誌』七、一八九二(明治二五)年一月)。
- (27) 家永豊吉「我校の養成すべき人材」。
- (28) 高田早苗「諸学校の卒業生に告ぐ」。
- (29) 宮川鉄次郎「十三年前の寄宿舎」(山本利喜雄編『早稲田大学開校東京専門学校創立二十年記念録』三四七〜三四八頁)。